



住職挨拶

今年もお盆の時期となりました。昨年からの新型コロナウイルスの影響は未だ続いていますが、ようやくワクチン接種も始まり、収束への微かな希望が見えてきたところです。しかしながら、以前の生活にすぐに戻れる訳は無く、先行きの見えない不安は誰しも抱えております。今回の出来事は、人と社会の繋がりにも大きな影響を与えました。家族間であつても会うことが出来ない、地域の集まりも自粛しなければならない。また社会や企業も急激な変化に対応するも限界があり、個人の責任は増すばかりでした。その中で孤独を感じ、心のバランスを取る事の難しさは社会問題の一つにもなりました。

最近「コロナ以後」という言葉が盛んに使われ、新しい価値観や変化にいち早く順応する事が正しいという風潮になりつつあります。ですが同時に、拙速に物事を進める事の危うさも感じています。昭和の名僧、山田無文老師は「進歩というのは、片方の足で前に進む時、もう片方の足はしっかりと地に着いてなければならぬ。」と説かれました。この苦境を経験したからこそ、本当に大切にしなければならぬ事にも気付けたと思います。変わるべき事、残すべき事。その冷静な判断がこれからの私たちに求められています。

合掌

第12号
令和3年盛夏
発行
真龍山大雄寺
北見市留辺薬町宮下町109
TEL 0157-42-2418
FAX 0157-42-2748

お寺の動き

三世玉龍廣章大和尚 七回忌法要のご案内

平成二十七年に遷化しました先代住職の今年が七回忌になります。まだコロナの影響が残る中での法要ですが、左記の日程にて執り行う予定でいます。檀信徒皆様には法要開始の一時前前から、本堂前に焼香台を用意しますので、焼香後、各自お引き取り願う形になるかと思っております。皆様には改めてご案内を送りますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

日時 十月十七日(日) 午前十一時より
場所 大雄寺本堂

令和三年度 年間法要中止のお知らせ

昨年一年間はお寺での法要は中止せざるを得ませんでした。ワクチン接種が始まったとはいえ、参拝頂く方の健康を考えますと、今年も再開するにはまだ早いと考えています。昨年と同じように初盆の方のみ法要実施して、それ以外の方は回向袋を出して頂き、住職が代わりに御供養する形になります。一日も早い収束と本堂で共に参り出来る事を願っています。

ホームページ 大雄寺のHPを作りました



daiyuji.net

令和三年度役員・世話人

- | | | | |
|-----|-------------|-------|------------|
| 住職 | 米田憲人 | 世話人 | 佐川和則 (旭南) |
| 総代 | 戸田健司 (大富) | 全 | 渋谷恒彦 (秋田) |
| 世話人 | 佐々木勝太郎 (豊金) | 全 | 工藤良二 (宮下) |
| 全 | 木幡和清 (旭中央) | 全(監査) | 荒木正憲 (旭一区) |
| 全 | 吉村義正 (北見市) | 全(監査) | 尾関昭夫 (北見市) |
| 全 | 井上勝昭 (旭三区) | | |

令和3年度 大雄寺行事予定

- 8月16日
■ 盂蘭盆施食会
新亡施食会 午前11時より
一般施食会 中止(お焼香のみ)
- 9月23日(秋分の日)
■ 秋彼岸会 中止(お焼香のみ)
- 10月17日
■ 三世七回忌法要 午前11時より
■ 成道会 中止(お焼香のみ)
- 1月17日
■ 大般若祈祷会 中止(お焼香のみ)
- 3月21日(春分の日)
■ 春彼岸会 中止(お焼香のみ)

仏事

Q & A

知ってるつもりでも、わからないことが多い仏教用語・作法もあるようです。そこでQ&Aのコーナーを設けました。

Q 最近、お寺で葬儀をしているのを耳にするのですが、希望する場合、どのような方法を取れば良いですか？

A お寺で葬儀をする場合は、まずお寺か葬儀社の方に希望する旨をお伝え下さい。身内の方が亡くなられてからどうするか決めるのは、時間的、精神的に負担が大きいですので、前もって比較検討される事をお勧めします。

Q すでに特定の葬儀業者の会員に入ってるのですが、それでもお寺で出来ますか？

A 出来ます。会場と祭壇だけはこちらで用意しますので、それ以外を葬儀業者にサポートしてもらおう形になります。

Q 施設暮らし等で自宅が無い場合、どうしたら良いでしょうか？

A 通夜・葬儀までお寺の和室にてご遺体を安置出来ますので、必要な場合はご連絡下さい。

Q 今のコロナ禍の中では、どのような葬儀の形が良いのでしょうか？

A 現在は一般会葬者の方には受付にて焼香した後、すぐお引き取り願う形が多いです。参列する親族の方をどこまでにするかは、ご遺族の判断で構わないかと思えます。遠方からでもどうしても最後に手を合わしたい、都心部から来て方が一、迷惑かけたら申し訳ない、どちらの考えも理解出来ますので、よく話し合っって決めるのが大切かと思えます。

心のたすき

私たち一人一人、それぞれの生き方があるように、それと同じ数の別れのカタチがある。そこにあるのは与えられた命を真つ当した姿と、亡き人とのかけがえのない思い出だけです。ここでは毎回、色んな方に亡き人との思い出を語ってもらい、その思いを次の方に繋げてもらいたいと思います。

「忘れられぬ夢」



尾関 昭夫
(北見市)

北海道の七夕は一月遅れの八月七日に行われ、竹の代わりに柳を使うのが昔からの習わしです。夏至から一月半も日が経つと日没も早まり、木造の家並みの窓に明かりが灯る頃、子供達は玄関前の七夕飾りの下で、花火をしたり、「ろくそくたくせ・・・」の行列をしたり、そのうち見上げると満点の星空。

その時、星屑がゆっくりと天から降り始めた。その中に五歳ぐらいの子供が両手に風船を握り、ゆっくり下りてきました。

(・・・あれは息子ではないのか?)

地上では七色に輝く金平糖を拾おうと子供たちが大騒ぎで、息子・昭人も両手にダイヤの様に輝く星屑を山盛り抱えている。

(いや、まてよ。息子は一年前に亡くなっているはず・・・)

私は意を決して声を掛けてみた。

「昭人ー。ここはお前が遊ぶところではないだろう。」

息子は振り向いて、

「わかっている、お父さん解ってるんだ、今すぐ行くんだから。」

そして姿が消えた。

実は、これが三十年前に見た私の忘れられない夢の一場です。昭和六十一年春、希望の高校に夢膨らませ入学。夏、陸上部の大会に出場。秋、友人と文化祭の出し物作り、七キロ校内マラソン完走。そして冬、十二月十三日、肝臓がんにより北見日赤入院。二十六日、北大転院。三十一日、年を越せずに逝去。お通夜の説教の中で、先々代の方文さんが「人の命はシャボン玉のよう、生まれてすぐ壊れるものや、天高く飛んで行くもの。」

果たして息子は屋根まで飛んだのか・・・毎日仏壇の前で、生まれて僅かで壊れていった方々の尊い命を頂いて、今ここに私たちが居ることに感謝し手を合わせている。

合掌

編集後記

この度、今まで沢山の絵画を寄贈して頂いている堀貞夫さんに、私の肖像画を描いて頂きました。一畳ぐらいの大きさの大作で、どこに掲げようかと思案してる所です。来年の会報に載せようか、一度皆さんの目に触れてもらえればと思っております。

住職